源氏物語 六

貴 12
881
58

宮城県図書館

あもとうまをあるはまとあまをてかやれやうきれ陸と徳じ
蓮華の蓮さんはは山里と拾ちくたくたくは雅人うやうき
の陸沖もあさんとも沖きてはおくはうれたてもも
うとあとも横あもとれたくはくはくるもたくとやうとき
とよめ彩をあのあもも多く
沖宮楽今十八律師ありあるとめてはけるれとときて
さもを行へ　あよあくはひくは沖宮楽やとの春の月の
はあまとものは付くく沖り行也
念仏の徳とも教えへあもせさ彩行へ　あるうれへ
教よ信をへ行也
罪はとあるくなれわさやはは沖せく　多はあもくへの
るも　細　へあの八月宮の沖とあれもも
うろしへさとはそとつさや　罪うろくはは手とと

[illegible]

七月[illegible]に[illegible]

[illegible]

[illegible]

こまとの帝陸奥の舞のかりのみやこ女えんぎ歌也 きみ
とうむ也
はくしこさうきん
陸奥のうぶぬのうつ
きたるとて産はたるとくへとえんまとはうぬとも也
後の歌ものこんりはもく後ものこ有りひなく
さむ身りとをもれまくこれをつかんとこあのくに
うとて名ものと　年げれたりとて帝陸奥あをゆゆ也
後あのこして　あるのうち他行あはくぬとも帝陸奥
う銀の内なれとも者りある所かく後こ他をあ
やうにつり　花ひとくしかあれをうと
おしこれをえうとも
たるはくをうくぬとも也

後の人くのこんをおはをはくをはくをはくをはくを大和歌
まりとはほくひ思ひあるうのあはくぬこ他みをはくをまく
名を歌也　女えんのよくまれをるを他をうをまくの
とにはまをさとひあるを他
あをまくこをはまりをんとを行くくとをまくこは
めをとくを紀ものこ有
まのてくをなを他やをにうまをとのれ行くんと　女えをまく
てをれをくんの国をりをんまれて結を他をはるくて
思をとの紀をの他也意をくををくをもをくを行くをは
て女えををを也思の内なを内人の同を行のをのをを紀
他なれを也
その他をくをもくしはをたくをれをて日行をを面に帝をを年を
あんをのはゆをををくをひのをゆんくをれくのを行を紀思

ひろかみをもあらそへと　於之の切なれはけそ行ろるるとあら
しれなる也
あるあらそふなというあらしもを行ろるこそ行へるやとこ
まろにうきなるく　もなかのあらり意とうくくそふ
見なれとろ行也さるへさとこそくそうなるかるのん
也　細　おろくしなりかよろくなる
清津ひろかの大なろ大輔と紀く行ろる　仲信ろる也
心のとろにうろのとろり
意の仲信あるく行ろの行綱
也もなかとうなりをきなるあんあとうまるにそた
てくもろを四さくはるくをもかるしろをもかるなり
ろくとのの也　細　口ろく清津あるもの行ろる也　於ろる
河あるろ行也
年清あるへ有ろにあるなるくひしくもをやうかるなる

さるとろんあるを今より後行るよはをてもろるくひろ
くく　於　意あるとろしさるくくとも
ろくやうるとろんをるひとろ行へ　意とあろり
家かるまくくさるれはそあるくあもせにへくあるさやくにそた
ろくるもあるみ代我ろろくくろひ行へ少なもとも意
意字如へ
おさなれへくあるくあるる紙おはやまにはくうまろんを
ろるくもくくろくくくるるんなとうを家すもの行ろり
安天ろ後のの碧れ光東を行るも　細　法皇とろ
わをあるも
ろくくくとるむまくくあるくくひなれは　安天仲信とよ
くくろる須也の碧はあるるなをとろ世行くく前也多
おとをるれ行くくあるるくくくくくひくくくくく

信を呼入給ひ給ふるや

あるうを信ゝもせやつひなしてせめてよもとへうつるとは思ふ

なるべかく　かよなれとも一きの人なれとよもとをなる

ありつひなしあるとは思ふてうくいつるや

つれゝさとあゝも別信ゝぬ命と思うをとは人なけれ

信るに　母えの色養れ文を今や千枝のうるみ代いまゝ孫奴

とも　細　母の色うるや　かの文の祠の多の事

うれ都せ事思ふ給へうるを　蓮うり若

文とのんたのふ若命下れなゝくあるうやとも

年はをんほうを有信をのの思ふ給へあゝ抜をを代教ゝぬ方

つをたりにを給へゝて

とうと　細　宇治ようちもて海とうめゝとも　宇治の信居れす

ゝゝ思れさ信ゝと祇ゆくをんなゝくあのゝ宇をゝを信

ゝみつうひなゝ思給へゝて　細　京へわゝゝてんとも

思の契をとゝうをうれゝくをん信ゝにうをゝきあ

せゝとに海の記信て今をつゝゝあゝくを信ゝゝなをのゝ

ゆのゝをを信へをにゝをを給つゝにつをゝあをめをへの海

ゝゝ色侍ゝくゝあのゝを給やゝ信ゝをんなとゝれたり信ゝ

ひよをゝくれゝをとを代　宇治のれゝゝをとゝつゝ

平家の人思ゝ抜ゝ抜ゝれゝうをゝをゝつる思に人抜ゝ

るゝとゝをゝをゝつる河や

思ゝ抜ゝゝをゝをゝうゝ信ゝぬ四ゝをもへゝれゝ　大す

あゝゝ海使なれゝ海ゝをせぬゝゝれせんやれ母えの色

かの思にをゝんとゝゝをゝてゝをゝつゝ抜れゝんさんつゝ

を力れ抜ゝゝをゝをゝを海ゝいをゝてゝ海ゝにのゝゝ

代常とゝ抜にをゝんとゝゝ母えのゝをを思ゝ蓮ゝ代

物を通あれとも通はなるやうにみてをを用をしたるも
班犀帯とハ犀角あるくまるくしたる帯といふ
なり帯をたかもの物の名ハ班犀帯四位五位の人帯に用ゐ
きんの心なり　花　班犀帯
公卿服ハ烏犀帯　涼殿あり　班犀とさもやうに
さいくろ行ひやるを服の時さいやう
細　宮殿より高くせくたれ屋へなきんやうなる帯也
きんさん班犀也
通所むしれ人の清四きしやとてをくをけつと
物語れ幼さしに用ゐへとの様也
夜より清ゐんせさいを通をいとをなるのさうれとの話
帯をかれ強海なる紙無えの物なる付ゆあるねやうのを
の話なり　細　只今ハ今紙のをを物を云意とも　仏　仏合ね

やうれん
をとををみつをあひ行りたるひををををををを
ひのるれををひをねををを物をものをを行ををあるの
仲行の様也あひ行り結ものあとを
いをををにまをねほとハなりくいとをりをく
きん　うをを　物
まを教をねを行を　いまをねををれとも
人り行ゆへをを行ををせ行して　物を紙物墓へ来
らをををん時をハをの物の元帯ある門迎ゝ結をを
人の物あやうけを事をを使りの結をを
あやゝををんとれ毎天使りの結をを
下れ様也　物をなれをとをるも果
みる事をを行りてををををんやをん物ゝ行り結る宮宮

ゆ　細　あれやへしやも

まことなるるるるゆゆるるとしつひとなれ人々れと

細　常陸もろるるるとめさむいへ人さとしいるやも　薫ろひ

やり海ちさと弾指も　於　薫ろへ常陸もろふるるるに

むつひ可なるる

清つるあと　細　浮舟ふ文り常陸もるのむとめ物ととある

ろれみるも

さるるとれへのむとめまるひやとあ　更行たる人

のひとめれ内つあと宮仕ふ数なれるあるひとも行日

物られるるへさにるるめ物さんとれへのるるへ

きるとるれ　り給内つるれるるるるるとへのそ

しるへちるるるとも物りるも薫ろ母天のむとめと文は

るひるるるさいるるこ語りんとの語るるるるとせとれ文

のあれとるとと物列しるるも

をくへるるさあやしるさんふ世るるるたるるるる紙もち

のあるるるひ物るるる　平へ又やしるさ女るるとと月る事

世にるるるひるるも　河　九俗　日本紀

かのるれむとめも弟るとへのるひるさんあもわるるるる

の　常陸もるむとめあれるるも

るるにあるへるるれるるるあるあ　於　るるに

あるるとるけるるるるるるやられ事みるるあるる発るも

ひるるるるるるるるるるるるるるんあやの心り本紙この

物るるるるる　り物るるるるるるるるるるるるる祝のるる

るるるるる行るんとの物も

物るるるるるるるるるるるるるるるるるへるる事

物るるるれるるるひるるるるるるるるるへるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

うゝたにさゝのうゝたちのうゝたちあうゝきて　かすれあるさゝ和
へ常陸ちゝのくゝ書れるや　仮　かすあるはのるり
おしゝもうゝ夢あるつるまちゝとゝゝまり　女房ゝ所
おりゝ所母ゝの振あゝ行ゝとゝるり服ゝなるゝへゝ
年はつゝくゝにゝんあゝるゝなゝとゝ身ゝまゝゝみゝゝゝをゝゝゝを
ゝゝ氏　母ゝの心ゝゝ書れあるゝゝをゝゝくゝゝゝゝるゝにゝゝゝゝゝ
せゝるゝゝゝゝ　細　深舟のゝゝ示ゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝくゝおりゝゝまゝゝくゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紙
ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぶことなくいとまさうしやうのもとの
ちとせ菖蒲の面影のそなたもとくさやうしもはうに菖
八幡さうぐうの社とうの
りもの物ことの事ゆゑ行くまたるけくそのもゝさとにうんなと
まつふとゝ月ろたも　七
まつ〳〵行うんせつの行くゝゝ紙母えちるう浦ゝや
まゝ〳〵あのをを海〳〵はとゝたつにあゝまつひくなるゝ紙ちるも
今あんうちなれる　母えの物のことゝとゝつり
ゆるをあをを〳〵世月中しくうゆきうひうへゝも月ふ
菖のゝをゝ菖のれ地りゝるも
ゝ物ゝのけちゆりゝもゝ月行ゝゝしゝも　細菖の
也海舟の母生み月母のゝへゝをゝはゝふれゆるも
也ゝ物ゝ月ゝけへ見事なをゝゝるゝゝも月行ゝゝしし

る方板みもゝ又あゝまゝ〳〵ゝ事
紙あやまゝゝみゝゝゝなひはゝるゝゝゝゝたゝくゝさゝんゝゝは
ゝゝゝゝあん　菖のゝやゝの物代光〳〵ゝる也
人の物〳〵ゝゝ祝んゝゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝ九日のわゝさ
なゝゝゝゝを行ゝゝゝ　年　人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝの物〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぬへし

常陸つくしてかとなくわるくしてやんあやしやしやくく
凡夫の　　えるしられやすとを蓋の毒物のえと蓋の頭りあ
きたとを宇治の茶くしたくしられたのやうに弛毛をるゆく
ぬとくくくれの害を後悔や

幷　宇治へきたるや　　れ　ゆるのう事

ゆゆのこうまをてつるめくきとせきをきんとをきとひいたのうち
母天のんやもうゆゆのうをを後ふ
なをを物をきくなく　　れ　もとをとをとを

藤原 頼師 兄弟 三位 唄 教花 堂達 えと七
僧とゝの也

今ゆんゝ侍人まゐりけるとやみうとまてゝさゝめゝあ
乃 菖つゆ殿と物おもつるゝ
宋 ゆつも菖の殿物おもまとさゝゝ侍るやも
わろゝふもあゝ侍り事ゆゝと 菖の殿とゆゝ
ゝゝぬゝなれとも女二宮ゝ侍わ殿れあうゝ行んとゝ侍つ
をゝと物ゝゝゝ合やも 乃 ゆゝゝん
あゝゝゝ

[illegible]尼たちを法花寺にあつめて[illegible]給ふ也　細　蓋也

[illegible]

后の宮の法華寺に[illegible]

四人中宮職[illegible]源氏の法華寺[illegible]

始より光明皇后の中宮の職なれば[illegible]

[illegible]

[illegible]

二乃宮の[illegible]

宮也四人中宮の職也[illegible]

額[illegible]　后腹の二宮[illegible]

[illegible]　仏式[illegible]

[illegible]

[illegible]

仏宮[illegible]　細　白也

一品の宮乃法華寺[illegible]　仏　[illegible]

宮の[illegible]

[illegible]　細　一品の宮乃[illegible]　女一宮[illegible]

[illegible]

房の中に自宮[illegible]

[illegible]　仏　[illegible]

[illegible]

大將殿のうつしてつとめ[illegible]　宰相乃君とい

殿人乃[illegible]　蓋の[illegible]

弄　一品の宮[illegible]の女房　花　蓋乃[illegible]　女一宮の

[illegible]

[illegible]　蓋の[illegible]

小宰相の君と琵琶の遊をとうり
ぬるのこゝろをうさとあつるにはゆゝしくとゝまりぬ人みけま
さりのこゝろをとうれものうちつひたるもゝわれかゝとあんをう
ありける　はるゝとゝまりぬと　細　琵琶たうへ
武ゐ之宰相いとゝまりぬ物のあ行て　花　白ゐ之人とた
あるもゝ思ふつるもゝてゝたゝ行きゝ四也　菫よりさ
後ゝあをとねゝくゝ行くゝ行ひたゝをまりゝ行也
ゝるれ物ゝ　細　はまをなんとも
まんのひやうと行へと　白ゐの家物みせんとのんゝ
細　白ゐ小宰相の菫のゝとひやうゝ行也　翠同
行　宮れ菫と小宰相との中とひさを行ゝ也
あとゝ行ゝゝもあつゝゝをなくはゝとんはゝく行ゝれさ
まなゝれ　小宰相の也白ゐあれんゝとにゝひやをれと

翠
我ゝをゝとうやうにゝゝまゝるゝやうゝあれんゝとも
菫ゝあゝゝんゝなゝとう白ゐあゝんなゝひやをゝんゝとも
細　小宰相の也白宮なれゝやてゝひぬんゝもなゝゝあゝ
ゝ四ゝとゝてゝゝゝゝる也
ゝあゝんゝゝゝゝ

あられたる心をもとくとも教あらはすとは教あらはすとは教あらはすとは

さやうにめしたるに宰相のうへ蔦わらう行也
たちうちと行ろ　仍　宰相のうへ也
いとをかしきに袖をかくす　蔦の姿也小宰相殿の
と心ろ殿はまとも乃々細也　細　蔦乃様也手生者
たりをさんなりとも也
あつくるやうにるとも乃ひし殺とぬ　蔦の恵乃恵ひ
ありさにたち大迎行つぬとのんも也　仍同
人うとも乃んとなれり　蔦のまうへとの様也又者
宰相のうへ也　細　小宰相殿可給人と乃とたり
いと袖をれさきるるうしう　宰相のうへ也
はかりひるとひくせくはとたれやり戸をうちにはるとの結
るかうをいるくはゆきとちをうにあまりひきしても
あてていとよれ殺る袖なとも也乃西　小宰相のうへ

早下也
乃うへうとをうれを四あくさ者をうひあるうう郎
蔦乃幻也も袖をりいは式宰相殿のうへさ乃者也
禁中れを所乃うたる所へ　仍　四あくさ者ハ也
うみあるとれさうるうはあるうぬと乃を大内はたらう
きうれをやうたんなとよれと也　花弄　細同
あそうをいてたちうん　宰相殿はうへ人乃けあうう
しさの蔦乃幻也　弄　人あくさ人のあとうを交はうへ
よ出うんとも也　細　宮はうへ人乃を出うう者とも也
乃うる袖あうをあるもあううをうまり袖とや乃殺
宰相とハ蔦とを人の袖あてをるのくさ人とも也　弄　蔦
乃四は宰相とを人乃をうをうれたうんよふくうぬ
ちうれ乃うう

人々まゐりあつまりたまひ　菖蒲の御湯を使ひ給ふ

人の教へきこえやうにて　菖蒲の御湯

ゆるしなくやうにて　菖蒲の御湯

きぬぎぬ　花　菖蒲のうく思ひもよらぬ事

きぬぎぬ　細　うきぬ　れまさりてなり給ふ

きちかの花のちるとて　八講せらるる六条院のほとりの

さかりの人もみな　ほのぼのとなりぬ　ほとりの

うせぬ　をたづねきこえたまふ

六条院　おほ宮　源氏のほとりの八講　元日の

きぬぎぬ　宗上の清涼殿　細　夏の御　山吉

くれぬ　とうきもて行　中宮　ひむ

夏　ひ給ふ　花　ほとりの

盃　源氏のたまはれる

立春の日　細　新年の日也　立春の日　八講なる也　又中日

なれる也

女房　まゐりて　年　物　人　はるる

元日　あり　花　五日　新年の日也　新年

きぬぎぬ　細　元日　十五日の八講也　新年

ミかきの　八講也　新年　元日　ひ

ちぎり　去也

わかぎみ　細　寝殿の

小弟也　東ハ　塀　西　行也　宋　ひ

たなびく

みかりとたちくはくらふみほと　ちうしとそもとりさしの
とて人くいうこみてうちはくらふもそもとりさしの後
よ女一宮わらはやや
西のわうこ後り殿宮行うまうくること　弁　一品宮の事
六条院の内よりも寝殿みくに八講行うくあや
物ちくちうして女房とものくはちりとやめくるもの
女房とのくはちりとやめくるもの
八人もくあるやとも　花　こう八国也
行ちの人きいとくあるかたりの　女一のうくれる
大将殿なとをきうくく　弁　中宮の八講の後也
八海八来学也与物ちよわうたあ行也
子まりの御僧のたちにうあるの行ちの人きこあるにたり
ほうとのうくにおりうきるにおりうきるにぬまけ沈のうくに

もうこ行て人きくあるおりう　宣の物れ話ちんと
あるの僧とも皆逃ちうたるやも
おくうこ宰相乃君をうとそめふ几帳たちうきたりて
御中きも　弁ち人宰相のうるひうこうたるにうると
てうくいみとけうるも
女一宮乃君あうり　女一宮のうきあうり
うこうとけうりをしわうくるも
人のうきあのとうにやをおりうこ宮　宣のそうこ行也
宣乃君行也
めうくうれうくにたうくいうのうきあきたるうりやをうこ行へて
廊下ちうとやうの行也
宣さやうれ人のあうこ所けうこひあけ仏をうれくしをきうう
ひたうきけ　あくこ宰相なとうあうこ行やうれ君乃ひあき

あらしとやをきたを一ふのあはつまをとやも
中くにあすてうものたちくちへあるほうひまちはんちはさるて
おくるもや　おとくしをまあてと云てまたはるくん
ゆるやさんれて中くとうるる
ものとものくるにとものくわるとてさつくへくはるる
三人たちるとうるやをあるり　歩とくくはくしこはあ
つるりやは水の年仁徳天宮はあはもちくまちるる
やいつり　花　西喜主水司式云九位沖水右起四月朔日
盡九月世日其四九月日別一駄八駄為駄堆二石二斗
又八月二駄四駄六七月三駄又日九位中宮水右又八月日四
駄今案水物六七月のあつきはをかはしてをはるる
をとなるや今物絶りはるる中ふへきはは水はへし
うるは　歩のるまわるくこはは一日を水はをは仁徳のはるる

昭たるるやをうん二月一日二日四月又六七月ものるや
うるるあをるうるるもるるるみあるるちるをたはは　弄ほるる
日なるるるるるるるる云れのはをるるるるるるる

さぬるも

もろこしのさかなをうゑあひうれたるほとをそうんぬる

こうしたれんとんあり山もとをみるへくをほるこをもとりや

ちはやも　女一宮のあつさにたまりかねてをしこし

あれくるのなたちをうつ　ひ　おへうちをけちをきる

おさぬるも

おもしろくなるこんさきことにはちるとれ心ちをもるれやひとの

ゆたくるとはしたる　顧左右而言他　ハニ

ようけ様さをり女一宮をあるとかいみる彩色をのとくをも

細　長恨奇情彩色如去とはなる主死の前をてハまをれる女

ハ治土のことくをみるやうるも

きたなををくをれひとへうをもをあるもきをる人のあるをう

ちはをひたるをとをいはんやをうるやをみをうあ

光八幡さしをる小宰相姫へをしをを稿しをを稿も

中くををありひをりをとをるををたをさあをくをんををへをや

てををくをひたるまをあへをやをはをくあり　小宰相細やを

ををあくをををとやをくんやをををるをををなれをたをそれをを

ををとをををへをををるや　細　をををををををををををををを

ををををくをにををこをのんををれをへををををををををををを

にをををををををををををををををををををををををををををを

蓋をををも小宰相の彩をををを　細　小宰相も

ををあをくををををへををををををををををををををををををを

をををををををををを

きと人をうらに はきて　　ゆとうしうに とまれものよりあて
ちりとも せぬ人のことも ゆと紙すりつゝて 女一宮よりの
花すりうしに 花なりとも きるまかれ人つるを
おまへ人あもとく あ事せたまへや　かうに はきて その事
いとうしうしなりはさ紙やり行てのこゝを結
女一宮のはさ紙やとうきをうう結へとも 事よりつゝそれて
もち結まゝさやの結やつるもたゝしとをうやもの まゝ
きつゝや　花 きのくちとろる
つれもさゝゝきのくもりつゝやの結みはてゝ ほのうにきくを
限りなくうう結ゝ　女一宮とみるゝとゝに 御新とやの
うまゝゝさとの後や 意の心
まゝいとちいさくおりゝまゝし 御よあも物のんゝゝてみを
つゝし 御めてたつちとれは結やと 知をまりゝ

女一宮はさなくおりゝまゝし 御のるや
をのち 結ゝこれはもうひとをにうう作りはる物をつるる 神
紙のうう 紙ゆうみを結つるゝ ゝこのやをうゝは物とをもん
とをるにやわゝんやうのをきの心なくあまるつをを 紙
り　神社の紙よ物紙思をやんとて 一ふの うをとをを結を
の意れ心や思ひとつる代 事よ物をひうちなる心や
こをゝこつをゝの小面よをゝ事れ
六条院の四月のくれるや
こつをさうゝをゝこれとをくあを
花 つ紙をさたる事なく陰をゝ物ゝにをるを
ゆるをたるをゝを
思出く　陰よゆゝ紙下 鶴の女房ゝ出ゝ 四人ゝ結結
とつるや

人まつ秋の月のまてさそらふる道とそひろれいまそひいる

下臈女房の心

山あををそとそらに消ぬるにそれ雲んとんさうさあとのうさ
ぬるんこんこもそこをいのとこうそそこきんにそ道いみとたち
ちうてそれとも見こしをいてくくしきやとかりのく

草とと女房うるつきたるもや

四て道行ひぬ　草のそれとんこしやそう道行さもや

たくさにられとと意記物為きぬ行きとう

こうはもといくくなわさう郷内九帖とさんあくくに訓すて

弟あるよ　下臈の女房れるのやはまてとはくうにそてたる

ゆ行きるやいみくさるさやこの草のそこ行るやとうう

たのたるれさんたちるくんうとれんとくきまてくるやあも

わくもそのゆくくわくこそもきうたくくうをたくくしや

夕雪れ見ちるとあやと女房う思四や草と家えようとう

をきさんのねるもきさにみてる道行ぬんすてんとそうち

雪くしようそうくいるや　細　夕雪れ行る道ちるくくしとや

うるくくもゆさうん　陸よあをたるとうめにとうくれは吾

たとと出まんとうの女房のんのうるくの出塗たる道代

ひとくくとうるもくくあるさやとんこのうるくの出塗たる道代

んとこそ女房行たるぬるくんうくやや　草ちるやのもとと

もくくとさ行くくとさせぬるうるそのそさ行とくくの雪

行たうくしと女房うるつや　細　もくくなれとととさうるや

山陰女の心ゆくひとうるや小寧れうのひくくれくくるあ

まてさくくさ風一ふれうるくくれ文下臈女房のあさ

まゆもるくく雪行く女のうるとうう　生

ひとくくてとうる　女房うるつるの道たるうるの後や

かのくにやうくにのなりしかと　蓋のことや八皆蓋
つんや　細　蓋也一ホ文字ハ四とうの行ゝ
一ホ〳〵そうくにそめて行ゝくなれ物ゝ文字ゝとなるうれ
蓋の大元ハ五つに行ゝ文字ゝたゝひゝゝとや
そうゝ　ひゝゝれるや
せゝとゝひゝゝ文字ゝ今ゝ蓋ゝ元ゝ行ゝ文字ゝ
たゝゝゝやゝ物ゝはゝゝゝれゝ　蓋ゝ文字ゝ
みゝゝゝゝゝとゝや
あゝゝゝ年ハ月ゝゝゝゝゝやゝゝゝゝゝ　蓋ゝ四やゝに
とて女一ゝゝと迄ゝ月ゝゝゝゝゝ

墓の祝や公任の中宮の御日女一宮の乳母女二宮
はさきやはらく仏法やと思ひ合せたるうんぬくゝ仏あり
ぬ物とゝ言ひあゝぬ物との意や
あるゝに仕まつりて大弐殿うとまれ
さいとの殿の
あるゝことに女三宮の御母や大弐殿とて侍
服をと調人ぬくゝそまに沈をぬつゝ参せとゝ
の殿付ゝや 光 一品の宮れ言ひ殿ひとゝとまひ殿
や 細 女三宮や 殿 物祝をるゝのるや 題別のるゝ水
を弐宮の女房り大弐殿ゝ
打まゝ女人をこれはゝられゝ打ゝにゝまを
まてゝやゝゝ殿ゝとわゝ白ゝ
房なゝ女三宮と墓のまてゝやゝて牛車の殿ゝ
ゝや墓れ仏ゝ女一宮のゝにゝてたゝを行てゝ殿ん

との中よりの殿ぬくゝ
墓の会捕ゝ殿わゝ中のゝたわり
ゝゝゝと行ゝれて 墓ん殿ゝ
まれ系中のゝわゝ行て ひゝはゝゝ女宮のゝゝ人海り
殿ゝや
の殿ゝの中殿 大弐殿の殿ゝをたゝ中ゝゝゝや
中れ性ゝゝゝをたゝゝたゝゝゝ 墓の祝や
殿ゝて仏殿ゝゝ女宮ゝゝ
物ゝ殿ゝゝ殿ゝゝ物のゝゝや
人殿ゝゝ人殿わゝん 細 人の数ゝゝ多ゝゝゝゝ仏ゝゝ
てゝゝ殿ゝゝゝゝや
ゝれたゝ物ゝ殿ゝゝゝゝゝゝに殿殿ゝ
ゝゝぬ深ゝゝゝや 傍側や物ゝゝ

そこにとゝまりたまへるを　女一宮は
あやうしとおもひたまへるに　蕊のもとに
花　なほさきのこゝろをかけたまへる
あるべきことにはあらねど　ひ　さるべきものとて
さぶらはせたまへるなり
御さきの日れいのごとく　もとの日女一宮のおはせし
のことくにおもはせ
ひとりしれぬさまにてもとゝのへたまへる　女二宮のおはす
くるのやうにもしたたまへるを　女一宮ばかり
ものしとおぼしたるなり
なほしたりがほなるやうにもあるかな　人のさまにもあらぬ
ゆゑなれど一ふしをかしかりしのみぞ
ひめてくちをしくぞおぼしける
秋ぞかしきをてくらす

ものせられる也　年　明日女一宮のおはしまさんとて
しまさせたまへる
ものしたまへるを　花　ものを小事和の天の歌
とりてひとりのみ　蕊のまゝにおはせ
と一ふしをかしかりしかどもなほ
心のうちにもあり　蕊のうちの月のかげよりはなを
結んとおぼしたるなるべし
結びとりて　蕊のうちの月のかげよりはなを
もてなしに涙をながしたまへる
月かげのうつるにしたがひて
とあり　細　書き出でたまへる
まして　蕊　書き出でたまへる
とさのうつりやうにくらべまして
まことはゆゑにはあらねど

女二宮を一品宮の御母君殺奉れと言はれ人の給ふ所にて
さんとのたまふ事あるとき御心おなくさめの草紙
物語
みきあるべき物 兄弟なる事
一品宮の御母君を殺奉れと宣旨の給へる 草の物語 女二
宮の御母宮さうし給ひて女一宮の御母宮の御紙をかんとの下
四巻 弄 一品宮の御母君をゆるし給ふ草紙物語
うちふかれ時うの御方の給ひしかの事を記さる事
あるべきとの給ふ 女二宮の巻 禁中にあり
し時内を一品宮の御母君殺奉れとの給へる事
を後に入しめ給へる事 細 一品宮の御母君
たくみ奉る事を給ふ事 細 一品宮の御母君
こそ物うるれと
草の物語 女二宮の草紙 あり

そこまでを結ぶ所にたるを女一宮母君にして文を
なり行ふ事 そこまでを結ぶ
いと長文の巻 おなじく宿世のことを給ふ
草の物語 女二宮下臣に物語して一品宮母君へ
うつくしかなとて宿世紙母君へ給ふ
いとうつくしう申給ふ 一品宮と宿世
やうあるべきことを給ふ 細 女二宮の物
をもとめ給ふ 細 女二宮の物
うつくしのものとて母君おとなしくとみまゐらせ
文あるべきにあり 草の物語 女二
と我私とに母君を下るべき物と思おもし給へ
なり 細 うつくしのものとの給ふ
そこの日をうつくしう文あり給ふ

四石中文へ葛乃葉詠也
白文也母后北方五わらて
立い乃宮ゑ也り一帝と
まれ也　帝に葉詠へた侍とい云り
丁ゑに為くそめたりうを地乃のとへとこさやうなれた
しにさ詠てらいとこれまし帝なるを　丁ゑと変して
一　葛ゑよみく深ゑる也　夏れ花也　丁ゑ深乃ひとへ
惟葛ゑさ詠ゑり河ゑ乃ゑたりこさやうなをしやれ
葛乃ゑ衣ゑ花面ゑり深ゑ心ゑやと年白文を廿文
果汁に物詠てる也
女の御乃ゑりれめてたりゑ帝あとおとしゑ也ゑくこさうう
みく　葛乃ゑ也一品文乃ゑ西とゑくゑ行とおとゑを行まし
白文の御ゑ乃ゑ地ゑ也
なれ侍ゑりゑ詠へゑいと乃詠ゑひあり

白文おゑ乃ゑ也ゑ詠とゑ也ゑ母后ゑ乃ゑ詠れゑり物を心
ひ詠とゑんゑ也
物ゑ行てゑ乃ゑ乃ゑ也
乃乃詠へて一品文乃ゑ乃ゑ行く葛ゑ乃ゑ也　白文の一品文ゑ乃詠と葛
紙
白文女一宮ゑ乃ゑ詠
ゑこひしさ詠いとゑるまし帝ゑさ乃ゑ也ゑ乃ゑ
しゑを行ゑ乃ゑ詠ゑ　女一文れ帝
絵をいとおゑくゑもをて葛ゑ詠ゑ乃ゑ　白宮乃
絵をあまこをこをこをこ母后へ葛ゑ詠ゑ也
女房してゑ乃ゑ葛ゑ詠ゑくゑまをゑくゑ詠ゑ
白文ゑ大文乃ゑ西おゑ詠ゑ乃ゑ帝ゑ詠ゑ女房し
て一品文へ葛ゑ詠ゑ也ゑくゑやて乃ゑ也ゑ乃ゑ詠也
大后ゑ乃ゑ葛ゑ乃ゑ詠て　中文の御乃ゑ白文ゑ

しまの中よ葛を巻てとゝ中文乃六条院葛
ふりてとゝ中文乃六条院葛
ふりたるよ行ふたハ海のたゝやうるゝもとゝもヤ行し
あり　細　中文のたまやも
ハ海乃ケうとく侍るゝ心ゆ人ゝ中文乃ふるまとゝ葛ゆく行も
源氏ふ上ゆ中文のたまるゆ
行たる絵乃人行はいとに
行と中文乃行つゆとゝ
公里ゆ行つゆとゝの中文乃ふるまとゝ
つとけゝ自ゝ行つ
一ふ文人第ゝ世ゝ道乃行の
葛の須也　女二文禁中とゝ
まて葛ゆとゝ
姫文の行ゆとゝ
行とゝ
一ふ文の行也
行とゝ
ゝ
ゝ

とうとくそのあるにとそあるあ今はくれうくゆうん
大宮の院参りゆかんとも女二宮とと一品宮とも
いらせつゝ心もと　細同
そまこうもとも思ふとうつゝゆ　女二宮うちいらせて
一品宮へとくへを参らせおくもせらるゝぬそゆゝ中宮れの御ゆ
細　意也

うれしう思ふて侍
まとうとうはまへさを思ひたうんとも　葵の羽也　女二
宮うもゆくくうちうくくゆゝ思ふとも思ふうり成
御ゆるとにうをそも教まへ行てうを
思ひいたれをあゆるゆゝ侍ゆ
大宮と葵の院れたれなれたうゝゆ　細　なうり
うとくくしをまくゝ侍をとにとくくゆゝ教侍

思ふあをとゆ
かくたくくくて内ゝ思ゆをゆるとにうをて侍ゆゝ侍
まへさを思ひたうんくくうをまへ　作　葵大宮
内ゝ思ふとうくも思ふひ行へくるゆゝ
まゝ高さも少しなを侍ゆをうんとゆをてゝを行うんを
うくさとに侍ゆゝを侍ゆゝ　まゝてゆゝ侍あくうり
女二宮と女二宮うとくくゆをゆゝ葵れうにあくゝ
まゝを侍たくくうへさにまゝてあうとへうひをゆ
たうとは今侍ゆをつくさるゆゝ葵のゝ侍ゆ
ゆゝ侍たくくゆゝ侍ゆゝとうをたうけつと
大宮内へをうゝ品宮をうりをくれゆまて葵内ゝ侍ゆ
とくくゆの侍とは品今はうゝ侍ゆゝゆゝ侍は品ゆ宮

人なりゆやされとも蓮の中をとうろのもとぬへ
立ゆそ一夜のんさ〜れんよりけりん　蓮たゑの行おと
是ゆも四さ〜れんとふ事おもわりんとや
有〜わさとのもたくさあよりんりゆやあはゆめして
蓮乃女一ゑをとゆ張つをたるうそをやめてのなく
さめにんなちんとや　細　八海乃河のうそ夜や
わまんとあ様こわうちうそ為ちにありけると
女一ゑのあまんを蓮れうそ行さ為や
みとのうちれくく四とによういを　女一ゑうそれくく
蓮よちて引はうひんつひをうや
をにいとちうそうそうとちひまてちすしく　女一ゑ
つゆまれ板神可然と蓮のうみんや
わさうれくくうたの男夜のえたちうとわうそ物つふけうひ

をれた　夕勇れ息を中や
はまよ乃およあ行くたうそにハ寄うあ〜〜　蓮の河や
一ゑあ乃女房とのあや
仏ゆ乃つをさんよい行とのかうそ行を月　女一ゑれ物と
あくを蓮よゆそ行るゆたゆとちれ中や　弁同
女一ゑ乃るゆと女房うとにう行を蓮れ河
いと為はくなくわおちひうそにある四ち〜行うと
女一ゑありをさんよい為ゆれ命けをとゆ蓮乃ゆ〜
ちとたる四ちをるゆや
今ちうゆや思わう〜毒ちん　蓮の河やとうとさうひ
くよ寄〜んとさとれんゆや
わうはうとわうさんとを為ゆうんうと
蓮のんやあうゆくしき行神とうんうゆやうゆ

人〻とかく旁れ見やそのあるかをとくうとくとつるぬく
わひのさんたちやそらかく旁れ見やまさかはりと宣
り蓋の名をと仰合あやうれ四九
地ひの名をちれくるぬやり弱　細　夕旁れ子蓋や
いかるとあ〻をを行こそ
をれさとぬ子　簾中より女房の立る紅梅うおれ
紅り蓋のわさなひ
在答りとをとをもく人寄りあをを行くわくぬ
弱をんとつるや　細　女房蓋の紅や
人〻れををひとわやしるをやひにわ〻をかれ
ちをあそあ　女一宮をれ〻いうとをれ物とつ
を風流り情をを〻〻をれんや
ををとををれと世中れ物語なを〻つをあやうに蓋いう

八月弱をり　蓋の寄をと女一宮をりトんあを片ちに
公弱をあ弱とや
地蓋八あのをりわ〻をを弱ひよあと　女一宮八毋后の
内をへをを〻を弱や
大宮大将のををに寄りつるのををひ弱ム　毋后の女一宮
よ弱弱紅や蓋八女一宮れ〻人寄弱るを四弱や　細同
内をに寄りたる大納言の君　女一宮の内侍ム寄る所
女房やをれを蓋のを紙大宮ム答をるや大納言八上臈な
とや
小宰相君り物の弱をんをにをを物りはをと宮ゆを片
蓋八ををムを物の弱りんとをやや　手　大納言をを言臈
乃ア紅や
まあ人のをををふ人り心をを終て物語をるを物

大宮の御やまとうつしとの給へり
御ちゝとゝれたるこんをゝ給へるこんの御をもみやこん〳〵
心もとられ百年公人なりと八蔵まんこゝろ〳〵にて八くゝ給へ〳〵き
ちゝく大宮の〳〵給へ
小宰相おもとけいとう〳〵ろやをし〳〵やの給へつゝく　仕人と蔵
うゝあひくもうてゆんゝと大宮れ給へ〳〵ゆをも
四ちゝうゝなれと　大宮と蔵八見申なれとも給へ〳〵
白ちひ給へ人とも
仕人とゝ給へちつ〳〵をこんをとうゝいなくてみしゝ給へゝんと
おほいゝちと　女房をちとゝ蔵をけんゆゝひをくてハ
月ゝしゝをちつゝとも人人と八小宰相おもとゝ給へ
人ちゝと八心ゆをを給へつゝく給へちゝとに立ちゝ給へ〳〵物給へ殿
やうに〳〵給へひゝく給へをて出ちゝ〳〵給へゆゝりゝくを給へを

大宮の御ゝおもつゝく大納言ゝ蔵ゝを小宰相のおひさ
ゝつゝをとゝゆも　細　大納言れ河　花　白宮の御事も給へゝく
ゆゝり〳〵きんゝとゝつゝく小宰おもれ給へ〳〵ゝをきにゆ給へゝ
ゆゝも
御のゝゆゝれゝゆゝるゝちゝゆゝ給へゝゆゝ
さんゝりゆゝれたる蔵白宮八ゆゝさんなゝにゝりて蔵ゝん
のゝちゝゆゝくゝなゝにゝとゝゆゝ白宮ゆゝゝ給へゝ〳〵ゝもせゆ
ゝと大納言ゝゝと大宮ゝゆゝゝゝ

宰相なりしとき　細　小宰相白女人
はきなくはしたなるやう
かくまでもあるべきにかくらんにはあるべしとて行く
小宰相白女へはいりてもやさあるべきにつひにこの網
言ふと笑へしたあるべきをいかにはしたなきはいかにとてひきこの網
はいりてさきの頼とかくはいりてやう　大宮の殿や小宰相の白
はあるべきなりんとてかくはいりてやさあるべきにて可然心なき
とも
仏人くもとの給　小宰相あるとも白女あるべきにはしき
るとてつきてつくちとのたまへるなり
いとはやくさるをしてやうしり　細　大納言有はしたに
くちをやさるべきにはいかにとのたまへるなり

こゝろなくあるべきにて　とも碧れうをなるとなり
宮れは二条のかれはおとうやを敬ふ　中元のるや
いもうとのれもおとうとひ物語りあるさいふ
　　光
はせうやうにて身のるや
おとうとの敬へ　とも碧は中元とはあるべきの見物とも
ひとられさにてのきあふりしるめも
おとはいるや仏は大納言殿中納
わかとともたくさんをなるはいつれなるにか　考僧
うかをもなるべきなるあもの伯母ともひとあるべきにて
つなるべきとも
そのあるべきにてとあるひとあるべきまつれ　とも碧乃
とも仏るあるべきにてせはりて宮殿つくる白女のあを
つとをたるべきにて物語時のとも浮舟書に宮へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そしらぬかをしたるかをもの
ものをいとかくしたるかをもとやう
ものをいとかくしたるかをもとやう
ものをいとかくしたるかをもとやう

つまくとをうたうた　弄　女一宮より女二宮へまゐらせ給
給ふ中宮をも御覧ぜらるるとて
大殿殿うちまもりてわらはしきさまをあはめて参らせ給
大宮より乃殿の兵部卿宮より女一宮へ大宮うたれ給
すまさらもたる紙をせらるるやも　細同
ひろ門乃ちなるの紙を乃女一宮をひらけたる枝乃々書にをひ
ひろく
此物語とれ世に伝はさうもしたる事ぬへしをを
文十巻乃きみくをたなるの息とをも　弄　同之　古
物語を水系物語を或又十巻をを此一帖乃
御心乃筆ぬをを乃伝へ　一宮せり門乃中将とありき恵
心僧都の勧女往生とをとりの物を今めをの中物を弁れ
伝法院乃記録をとりの古物語ありををりを法今乃

世乃伝此せをを門の中物さやうれ物をを　花　薫大将
乃と女一宮ををけををるにより物へをををををを
此物語今世を伝はさうを乃をを
きたる物語ありをへし　於　をを乃をを乃乃
此物語をを強極をけををを乃伝へし
ひそををををるかををわをををを　陰　ををる女
一宮のをへをを乃枝乃々書に出をを乃ををとあり
をををる陰をとれ女一宮へ薫より参らせらるる也
いとををををひををををて
とのをを
をををををを物ををををへのあをををを　弄　物語
乃女一宮れををををををををををををををををを
此乃をを乃女一宮物ををををををををを　於　をを

こゝろあるそこなわるさ　絵よりけるなゝ一ふのうひさたるす
もゝかるやそれとく一ふ宮ちひさ絵ともあれゝ
やを思ふんとこなわるさわゝやゝ草のうひよりてを絵合ぬ
はるみゝくハうけまとも早下してゆ絵よゝ絵や
歌乃ふゝり嘉ひをゝ秋風をゆゝへあて月みはをゝ月
草乃ふ知ゝ秋の絵ゝるまに月をけてよゆゝ也ゆゝ
ふ絵ゝひ絵付のゝをゝゆゝ　絵　草ゝ月ゝ絵れゝ名
やゝ月をけてひふを絵ゝうゝてをゝへゝ
さやゝ也

やゝくさふを絵ゝ絵ゝ絵ゝ絵せをさやゝたる嘉ゝるを
乃ゝをゝくゝをゝもゝたゝゝをゝゝをゝゝをゝれ
をはゝゝれをゝゝ絵ゝゝ絵ゝのゝゝゝゝ　草ゝれゝ也
ひふゝを絵ゝふゝゝをゝ一ふゝふゝゝ絵ゝゝたゝゝゝゝ

とも也又女二ふゝゝをゝれ絵ゝゝゝゝやゝゝの絵を月
知ゝくゝ絵ゝゝゝまゝゝゝゝゝやゝゝと　大ふゝゝゝゝゝのゝゝゝに草の
絵ゝゝとゝゝ絵ゝゝゝゝゝ絵ゝ　私ふゝ　女一ふゝ小寧ゝゝゝゝれ絵ゝゝゝゝゝ
絵ゝゝひゝくれゝゝゝゝゝれゝゝの絵ゝ絵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

結姫の郎とのひあまりてハ　大元宮法よあり〜まき者え

そをとうくつり

まくとあつうへよりとうてうひ〜色をはくをもうるふ

さうとそとをとうあ〜きさまてくやしたれるそひうをくれ

内〜つをにを　中元つるやしなやうへ中元と蓋

つ物り去結くあうくやしなとも　細同

あさまし〜てうをつ〜くのいて四月さなくをくをひうふ

たうりうるうつくしさのとひるう〜　ゆ碧の事

ゆり蓋のんも

さをとうにつをしと物と思うりうんはと　ゆ碧れ白文

つ〜とれそひ侯ゆ〜をとと蓋のをうり

秋〜ちなまひあ〜をとやくんのゆみくるけきをひうて升た

つをうんの有様とやう結〜も　ゆ碧のんて蓋の文を

者れやうのをたくこのあるとをうひ〜をくさを結者

白をあつううひ結〜とれやうを結うややをを四をとんの鬼とう

をうも

をひ出をまり　ゆ碧の歌流〜をれ蓋をあ結とも

打ものをを大をあるをてたく四やをくらうをれかをうひ

人ゆくあ〜せんやをひり〜みれてをらうをうんとをひと

ていをを宮をををうひ出ゆ〜しをををうをうたうを

有様のをりうゆををたりををうをうたをうをを結つをれくお

ほうも　ゆ碧のをれ蓋をををうゆもくしををたくん

やをををうをうひんををてあうんとをゆををうたうをうん

と結く案をを氏白をあをもうを〜しをを文ゆ碧れをを

ををうを〜たくあゆををたりゆをうやうよ石蓋をうるをも出

来たるをとをうんも

ふのうたにさはりなくやとしるべきかとて　墓のうへをとるを
乃地り拙劣したるも　細　墓の地も墓の雫思ひめ
たるべきにやとも
うゝ所をもちゐるを思ひ所をとるをとつくるまゝ
ぬるとりのうつり
宮ハまゝ高くさあるの所つくれめるこゝにあるぬるゝさ
とものはりの人さへ人さへたと　白のるもの雫れと
とをくさあるの所ともや彼めるこゝと八雫の形見ん
とやの雫れとの所の人さへ人さへたとの白文めんも
そこのはるこゝろとこゝ雫ハ長るとの所つと　中元のるも
ふるゝうんなれ所と所り雫るうちはきれ出つひたれをいと
雫くしもいてそうあるん
中元とも雫とんさうくと
をなまを所りしたれ所りしれ所りしたのこゝみて雫ぬく

ふ雫所りゝの白文乃人も
又雫ハまゝに高ゝやゝゝやゝるとの所さんようこゝこゝふ
たゝれも　白宮乃心のまゝにたゝ雫雫と雫ゝこゝるく
ハこゝの所ゝめるも中元のこゝるゝと所んも
うゝこゝの雫ゝ伯所ゝとそ雫ハのもゝ人さを所ゝるみるゝ人ゝも
ゝゝふゝゝゝて　宮宮乃伯所を白のゝゝまを所ゝも雫ゝと
ハおのもめゝれ雫るゝゝ所ゝゝゝも
めのゝもこれ人雫ゝゝゝ

いろ〳〵をものあそろ〳〵くのこゝろをしらせて　よ殿れ殿を
つゆのうへ　伏見宮
引歌　行て折てわるる袖の涙河　うきもしらぬ人ぞ恋しき
京よりのこゝろをしらせてあらんと思ふる歌ゆゑ
とくの給へと　伏見宮御めしの歌
て白雪の降り積るせとの歌
清原のうた　白雪のつもる心を
不及ゑ歌とのうた　伏見宮
ちはやぶるかみのまゝにあるわらはなれるものを
らんとおもひ給へ　よ殿の中宮の元服
きさいの御ゑんしゆ　とのゝ人〳〵
とゝのはるとく　宮のわらんとをうをひろめるもの中宮
ゝその給へ　女房ゝとゝ　ひ殿のとのゝ

御　中宮元服　父人のゝ　ゝもいろ〳〵やう　れ　ゝ
ゝとのゝ　さゝられ　ゝ　ゝ
いく　伏見宮
后の宮　ゝ　ゝ
あ　ゝ　伏見宮
いとゝ　伏見宮　中宮
ゝく人　ゝ　ゝ
白雪　ゝ　中宮
ゝ白雪のゝ
心ゝ　ゝ　伏見宮
ゝ　ゝ　伏見宮
ゝ　ゝ　伏見宮
ゝ　ゝ　伏見宮

らうたくなりゆくてんをもたれかゝるをもまうす
まうす侍従　侍従中納言の御子をまうけたる
みやすどころ　侍従　はるかにまうすこと
ことにものをのたまはせたるもの
いとあはれなりしかの姫君のことを
とゝのへたりしをやうくみてみまと
つかまつりしの姫君　侍従の四位中納言
たりしとも
かたがたまうしたりしかよりまうけたりしをひめ
中納言殿のおとゝ
をとゝ　侍従の四位
をとゝ　侍従の四位中納言
をとゝ　侍従の四位中納言
をとゝ　侍従の四位中納言

の話をする武士と　武士の心をあらためさとらせ
　身を修行とする人のためにたとえばよろしくや
うて大宮人をせらるるやうもたとえばくハ姫君と
　君とうつるも
清せうの修行をつひやくにたとえばくろ山人をたくさん
　蟹蛤の武士の息れ修行也　弄同
姫君のたくみくいとうれるの人なれと　一示
　宮みくれを具ふくに可然と兄ハ也仏合たる心如へ
面ンとたく心とにくたくたるを　仏　武士たるを
うくらあれとうのたるとうちつひく　武士の姫君
　たくさんに武士のうくるとあれハ姫君とうのたるとうるやも
　このこと拾ひこれ同云ふもあり　河よ同
たくうるとあるを　武士たる仕
　ほとうとうとあるを仕
　ほとうとうとあるを仕
　ほとうとうとあるを

うつくしきこんうを行ひくらうの
仙洞てんとうを行ふやも　白女宮天子を慕ふ
大将もとうをまてをもかわさう殿　白れ白きと慕
つまとうきとも
明日今日やいかくらと東女やうるとおほし　細　白女の
天つとあるもせんとあるもしやうを宮仕よりうそ
てたるるれ殿ろうへと云　於　殿ひとの白女天つを思宮
へやあるせんちとおもうあるる　果　白宮の天と春
女よりきんとの行ハ世白くそとの俗也
多ものをもをもをもを行きうう　慕ものを或ひとの家
のえうとありうん世の行ハと女仕よ世行ん也
如くまうれき世のおとうへとうるにハ　隠れ或ひとの居
女なれとも又宮をたなく如行へうやうにおとうつく

天仕よ出行へうの殿のおとうへたるさ海ものくあハんすう
ハ月紙なけ行もまとうハぬとれ慕のんも
天のうたにかをたりめあうもまとうハぬわさにうたと
うひて　花　白女の白心ハ殿ほうさうをうう宮舟の天ハる
白宮の行つるも　細　宮舟入ものを西ものも
花を流つく
人ものうハ四ものを行うう
白殿よりうまをハ四ものうをうをうをうをうれ
物よりてはよりもうをうてうをうをうを行ん
はくうを行くとおほうるたいとうもらうるるのうみたり
大女六条院よりうまをとくをひうくなりうるうをうれ
白ものうもみたりやうをいんくくれ禁中まりをも
細　六条院や中女女一宮ものを源をうるうも
宮ものとわううを行内のるりとうう

源氏の法六条院にて人々の位ゆゑ〳〵にみな
たのたまはせ〳〵れたりきこえたまひ
なくて〳〵とあるこはうさまつり給へ
とありひ給まも都とも
ろ〳〵やも　弄　夕雲の御ぶくれ給
らはとも　細　夕雲はれ給へ麓をこう
つめ〳〵白ぬはたるはこうるれて中くつめ〳〵へるとも今め
うこうこうはまるさうとあさうんありける　四位中将の
子孫繁昌し給との事ふれ抜列也
此条例の法にあること推はかるほとにつれるをたるすきをこう
給つまこうこうるのくこのまり行て　白雲も殿のうつり
結傷し給ひたる大宮の六条院よりあこ〳〵まりに行
こうこうはあこうんとも

ひとめあはとこう〳〵行ひるこうこう給ひ郎とみ西る
白雲も殿の殿なにはさこう行ひあこうこうし行とも殿
しやうに如給とも
こうこうこう又宮こう殿上あこうはこうはこうひあうこう給
殿　白雲の御ぶくれ
こうこうしたは如ぬとて　四位中将は殿服ぶくれ四人系
給へり
宮こうにこう〳〵こう給ひんとまれて　大雲禁中へ参給
んとも白雲の法とは六条院の御系とこう　細　白也
秋のこうの白雲の法とこうとこうんこうこうこうこうこう人〳〵
八位行〳〵こうこうこうこうはこうひこうこう給也　四位中将人
を六条院は参こうる也
水はたれ月とこうこうこうこうこうこうこうこうこう給こう

しるれてはしるそうふをもちいたくまてそやし行
白菊を山路まてそやし行ゝ
知ゆへにかなまてく　細　白のはさ海や
なをなとかんそうの花のはまし行つるに　白菊のそうちに
めるれてもはなやうちるやうるやくのはまてそうやし行
とかんとんとは行りあるてまむのそう花よりそうとん
たるや
大将の兵をいとうもうるとそうちるとそ行ぬ行くそう
うをんゆるひるはなはよりはのひとうと　菖蒲さしくる
をはなはつをうそう行うをはなはつをうと女房をはなはつをたく
そうくをそうや
侍の二ホ兵をうそうくはまうへはるはうへ行行
菖蒲さしくるへ兵行や

かの侍従ハ掛はるものそうをなるに　宇治の侍従今を
中ふをうりはまはは二ホ兵行をのそうさなるや
いつくふをくをうてめてたるはるはをくせはるこあるを紅あく
世はををはうをまうくあるさまくるをそうれく心うるをある
はは心うをはうをとくはをはうはをはをはを

しとも　細　伯信也　墓よりうれしきも
ちろ〳〵はちてそもそもさしはしめさ〳〵ふとなく
やそとへしかくまね　もはれさてとはへもくさて　ふるあへ
　　あらくろや　墓の物はさんとうれたるも
初ん　うれわくとのよわさはひたるとふくくあやくるあ
て　ゐくるくるもとあひやうにもとあるよりてあにうをて
女房はむつまくるあはもくへくるや　墓くくれるら
　　ふへありてあるとむつまくあはせとの行也女房と
　　うあやくもこ荷よんあもくへあくとも　行　墓の詞
女子にうんあもくへあくしう　細　墓乃り將也我と
　　くんあもくへくを女のもあるまくさとも
　　さをうにはるへうんをとをくへやるあくこもあり
　　はをちとみをはるみをくるもや　行　り我乃るも

やうくふくくと行へあれていとちんうまくさやその行へも
いとりくへみくくのをとみなくに　あるくんとくくをや
　　うくふ気行へくれはうまくちをと墓のく行也
　　乃物もとやてあれたるはるあ　細　女一文れはあるとさふ
　　らつ女房の中にはとちのひあるくんや弄同
そもむつまくるを行のみあへをはへなくんのをちやあくら
はくあるや　　弄れ物もとう詞也公物をむつまくくをつき
　　あをもるれりあはくちをくあをの者也想ふをもり
　　まくくんあなくへはをつをあをくも
何　わをもあうをてはちをふ桂程をもむつまくあなれるとへ
弄　ほくれをるれあを何よひをもるも必おけをるへくは公はを
　　をはあくを詞也墓よあ也養也をもやへ詞也墓つを
　　むつまくるをへあるのなくれ女房ふるとなをちまくく

せうもの理也とこそ詞よそちかのく侍るなすやとある
ハやとやとこそ心ゆへ〳〵そちかのくなるやとなるへきとも
細 そもとハ詞乃義濁也ゆへなるゆへをもて拾遺そもと詞
まし〳〵さうとも也 乃 弁詞者遠也と云つまし〳〵こゝ侍也
なをなをとそちかのくせぬとゝひくこそ神とゝいつる
拾ハ侍そハ中りく侍うなれ 弁乃詞也世中を
さやうにそ侍也とこそ侍也ゆうこゝぬとなれし
侍〳〵出くこゝ人なるとのんやゝ義よそつまし〳〵なんすし
そちかのそちかへさんよそちかのくぬとも云義也
花 義人のくるなんを中りくそつ〳〵もなをなるやこそ
弁 大ぶ侍〳〵そあるものなれハ女房なれいく〳〵みそ〳〵さる
とゝ元合なる詞也こそ 細 世乃乃ハ侍也めぶとも也
うゝもくそちかのくなるをはくんせ〳〵ゝおくみ〳〵も侍う

ねと 弁 詞也蓋へこそ〳〵なるなるとゝなるく易侍う
ハゝ〳〵ゝ孫とゝ心也 弁 弁ゝ〳〵へもるゝも必ゝゝ侍
乃 ゝゝちとを拾中に侍〳〵ゝも云詞也 細同
蓋へこそ〳〵なる細なとゝ宿く易侍ゝ侍ゝぬとゝ也
ゝそうゝゝもくゝ侍ゝそめて書ゝゝ侍ゝんとゝ
そ〳〵〳〵〳〵ゝゝゝゝゝ侍ゝ侍ゝ侍

うちそむきばうさゝ角ちかきや

蓮の葉や

女房ゆきさとたゝ人ゝるや　我まゝ名ゝ

蓮の葉　女房ゆきさえ立てしとや　細　あ女法ちるとうう女

よまゝ法もあゝさうをはたく法つまゝくれハ心やを

白ゝたてとの法てうこ

世ゝ花ゆうる恋ゝにやうせいあやるゝ花をやすん

人やをゝハ打ゆさてや　弄　蓮乃細よ和ゝ六人ゝ花ハ

女房ゆまゝ法もあゝ紙ゝたゝく法そん易ハ思ハ

てとの法ゝうゝ

そゝこ花ゝうゝ法ゝうゝ高ゝ人ゝを法人ハ井ゝうゝ

あゝもせゝのゝやゝにいゝゝゝ　うゝゝゝあるゝとゝゝゝ人

しゝゝうゝひゝさゝうゝ人やゝゝとゝゝゝ

今まうのかり衣をうちきてとうちのぼる
名へしやみも　　墓乃人
さんくまくくわくらんん
もとうるはれあつもとうくるくるくる

乙 梅ゝしてとあきハくるよりあり義ハ行きしるや
やこのまてはあふうちうゝめきを行へ　弁ノ羽也　葛の
うれ乙々弁をとちうゝめて行ともや葛ハ六人なる
人よりくこなさちうあるやうにの行へともや義よ
うゝぬんやうと高さとうさとうとうとうとうと
弁　葛ノ高よ高うさはとうこ行へこうゝめ行とうう
うこ　細　葛の方とうゝ如ともゝ行ともや
乙 弁ノ羽葛ノ高を梅心ちうにこなさちうはさなる
やうにの行ともや
大うこの弁人の行ゝらとして学くさもとうゝ
おうこのにうへくれ春よりこれやハを行とあつてとる
をうて弁ノ梅ゝして行んとハうるや春をめ
うちまう行へとの義めくハあゝをとや花ノるゝと

よりれて弁へうさうゝ学ゝうこるをて行をなる羽や
弁　弁ノ羽面白岡谷ノうるゝつうこあさのこはを書へさうう
行をとなくはゝゝ学ゝうむ係也く　細　弁ノ
羽面白ちゝや恐くれるゝをはゝゝや
ちうれさうこ代をうこの行をもへうこ後はゝゝ白の
とうひゝゝこちうと　葛の一ちうとの行をゝをとうま
ゝゝくへくれうゝとや　細　葛の音積也
心うゝ白あをさへちんよ　葛ノ羽也花とうてうを
そはうさうれの高よめうへ対ゝての行へくゝうを
ハあの羽よ後まうのゝゝ行ゝ高ちうゝ白
うこうゝゝうるゝ如へゝと葛の行へハをゝ助回みくゝ白
わをんとや　細　葛ノ羽ノ白ちゝに行へハくゝの行
ゝうゝ

まことにこれは花にあらねどもこれはいかなるものぞとあやしみて立ちとまりて

　　菫の花や花といへどもこの春のあるかのようなる花や独りうつむきて物思ひ顔

　　さわらびとよむ　　花人の見るものとてもこれはなほ女どもの見るものとあるべしと

　　思ひ行くをゆくゆくとどまるもまた白女の中にて菫の

　　花やうにてあるものとやうに

細　女房たちの和するさまはいかにきるれば花ますやとの

　　詠ども　弄同　　花ますやとの

　　ハたちにてはさわらびとも

　　ちりぬるに　　人々の心地弁れなるものの和するやうにて物ものの女

　　房を一つにあつめて菫の花にたとへんこそ四つ名れとも

細　弁ものの人たるものと女房をれたちにてもまた雖ども

　　菫の花にたとへんこそ弁ものやうにてはこれ女

　　房たちにてもまた雖ども

　　菫の花にたとへんこそ　　花弁ものやうにてはこれ

　　四つ名れとも

　　菫の花にたとへんこそ

　　つまあるも

　　来れるうんとうとうとう

朗

天慶四時心想苦然年ニ腸断ル秋天　白楽天　菖蒲

しらぬや

あつるさぬのとくちひるるやふるやうしてもやのけうし

まつとうとりてあるさにくるや　しら花とうとをるそ

あさなれと高のこたろうんや菖蒲つくるを三月へハけるる

そに侍るとあをくくとるやわのさやハ一品宮れけ

まや　弄　菖のされるはいひうう行くんのるや

ぐうさぬ鳥さもへうくんとろ事

宮のあのこわりうて　白楽のるり

もちとけるさに為うとれをそふとひ行へて

白楽の詩や　女一宮へ参る秋そと四月や

彼ひうつ中ねの元と学のや　一品宮の女房と参や

なれあやうのるさや　菖のんや白楽れ四月うて雅ル

殿やうてもとうてやうて為のうる事ハけまるとゆう

しをもるれとれ氣やそふんとハ白楽のうをいるや

雅るうとうそ地けもううちそふんるやてかくゆうをも

なくゆ野名さしまと心といとわうく　白楽のるり雅を

もるるより四をとう雅ん人とや

心宮ゆ代詩ゆるれてのこゆ人ゆ野色口わう

菖の行や白楽ゆ代女房るとれ到をゆへるケ詩うう

石素白をもるれ移ゆうしさんや　細　白へハ雅を打

こけゆなれゆるうもや　白　菖のん中れうと菖る

まちうひるるう楽ゆうさもわううやを移ゆうくれ

ゆをや

わるたうてけうゆうちなるけもてるうに女ハさをてそまや

をうゆ　菖のんや白楽のゆをるゆりうてあるうう

なるに女るとまを左のうたをとる紙をや
乃義也
あさましかりし白しかはのるるにハ祝るゝ心ゝのこゝ
草のゝもしかはるゝ乃ハ草を女一文とハ伯又ゝ
うゝ〳〵ゝ紙祝ゝとのうゝ下心あるにてりてかく
ゝるゝ女〳〵ゝさゝもゝハてゝとゝの初也　光さゝ初也
一ゝ文のゝうゝに草のうゝとゝ〳〵さゝとゝをゝつゝゝの結
ゝるゝゝゝ　細　女一文ゝさゝ風のるゝ也　於　ゝゝ中文
乃乃ゝれハさのゝゝゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さんとうこい物ゝ郎ゝの心をとゝのへて　花論語コニクカタイ本曰雍
平有頂　述而第七　弟子　人乃心ゝ　細　人の心ゝ
ゝゝゝ

きこのあつまりて度々とかたりあはせしに
もあやし〜　墓のさまもあやしき八幡行幸
時一品宮とうひきこゆ〜ひとえ
よりて度々とうとりはなし〜　細　女一宮はたまも
弄　女一宮のわらはやみをなつかしうとひ給へ　一品
宮乃給へ〜ものの給ひ給ふ　紙中にはるとも〜給ふ〜
雅宮うたはあるさにわたしたまひ給ふ人〜はかなく
ひわたさるようちとをして物語もする給ふりけり
一品宮御中宮乃ひとへわたり給へし宮八ひとへもちして
女房ちと月乃給ふとて出る所人墓のまもる給ふ
ちうれしくいとをつ〜うひさもふはゆをとかり〜く
なのもいうきあはよりわたり給て　墓のを用わら給さ
あとうく給ふ〜〜〜給ふとの給ふ

墓の殿もこの給ふまもるやうあり給ふ
ものとも引給ふとの給ふ墓の〜給ふ一品宮
ものまして墓乃給ふ須は墓の〜給ふ一品宮乃給ふ
故こ将織手時こ弄ニ小弦ヲ耳聞ニ鶏絶ニ眼見若乃嬢
愛スル心也　遊仙窟
越仙屋乃女の御とひくとやのうこうるやうこ　弄人乃給ふ
まし〜こつたもるやうに御とたとひくとも　墓乃心
見河　越仙窟の白拍子　ひくとをとそのの給ふ耳
乃女子ものにり　服乃給ふ〜〜〜給ふ
ひとこころ心ものも女一宮のうをとこのの給ふ
細　人乃給ふ〜〜〜給ふ御とをひくとも
服乃給ふ時ものもの給ふ〜〜〜給ふ
時越仙窟すてうきを給ふ　墓の殿越仙窟のうをあり

宮はらうらへうちれとも
ちもせひはやはらく
おとろくをそれともをけさ
みるへきこのうちやうらへ
うらひはうもう
　　もハ中納の母とう蓮の答歌
　　同趣仙宮乃詞也一部文ハ女二宮れいこのうち也
　　うもを抱のひとへさをなをうらうらうらう
　　終つるんちうへしき　細　もを趣仙宮也花ちいハ女二宮
　　はこのうちやうあり又乃詞ハ白文ハ女一宮れ花みてま

しまを抱ハ女一宮と乃ちうらんと乃ちうらく白文と乃
終へりとも　弄　同趣仙宮ハ氣の詞のいとはり〜ハ花の
ちうらやうう云詞すてうへたり四を白文のるをうう
女一宮ハ終つる白文のの花みくうやうるれうう終
へりちと云んも　ハ　とうつうを花るハあり行云蓮
乃ちへわりうちうけ女一文ハぬき四とうく女二文ハ
終りとも
まつうそハ花んううれ抱ちなれとうれさるれの
終く　　もを趣仙宮の花のうをとまてうう蓮ハ中文乃ハ
すちれを一部文母けは母ハれ伯父ハあるまうとうを云
つを蓮の詞也　細　蓮乃詞女一文のうはちうを花も同
白れうの詞を用を答終也　弄　同
きいのあるうにわりうますへうるなハはうさをうこれはさ

ともこれ行ようせさせを行ふるとあらぬなくとひ行ふ
　　蓋乃知也あること　　牛之の行ふこと　　を　　ふり一ふ之ハ
　　白雲　　白雲　　ハ　　何ふ　　ものを　　なくさこに　　行と　　何行也
　　雲と行　　牛之の　　ふり　　まこと　　西を　　ちく　　ふる　　ゆへ
細　牛之の　　白ふり　　仕　　内裏へ乃事　　蓋河
ひとこと　　ふこと　　もなし　　ふ　　ひたく　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ
行ふ　　ふれ　　と　　女房　　れ　　答　　ぬ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ
　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ
細　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ
行　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ　　ふ

の陽こそあれと八女一宮八女二宮八女内侍殿女三宮八女中宮乃殿女三宮八女殿なれ八宮殿内侍殿なれ八宮殿内侍殿なれ八宮殿内侍

行〳〵とうとみてく立ち行とも　細　或ハ人を立て思

行〳〵物をとも

乃つをてく〻ゐ行さ毎なとを　細　人よりたる物也

くやう〳〵　童女の立てよりたる物也

ものそのほのとつ〻面ゆもてのとこつまんるもうちちて

はくう行へてもてこ〳〵ととなひたる人〻てさ〻つと

ケ板よりたる物うあるうとの可然板と立のと

ひ行とも

人立まあ四ちをちとゆく行きは　立の羽也文元り

面白中れお宗ちたとゆ人立ひたるう〳〵とア

うんともれたそもとも人のうひるう〳〵てあるうとれる

ととさ〳〵のやうよ如ゆ〳〵んとも

中〻行人ゆしさをみる〳〵つんるとうるく〻いさ毎さ

てきの毎やうにあり行　元　故宮の西の山ひを八雅〻也雲

あるう〳〵行〻んとあるしし白きまの白行とも〻

まゆやうにあんとうとあ行とゆもとうれ行ちとの行へた立

立文立立の山ゆやう人のうるあ代もゆたちぶとれんも

引ち　元　引ちて毎とすうあにみもれ元ちうたて行く西ちん

列古立の代羽と元てたて毎とつんも又白の中ハ羽も

つうあにとうもとあとゆもしるとうつあやう

弄　四よあうくちつうハ羽よハあ〳〵うる代ふ云ちあ

とゆもとあちと行へとも立〻引立同　細同

元ゆもとゆひはゆ人もちう〳〵たちて　立元ゆもやさ

立女房れさう〳〵に立へ毎茶〳〵たるも

つちあり〳〵をちゆしたゆ行ようきくも　女房れ

羽や元元のとちひう〳〵も元行立四行るうとうう

細　うちうちにたるのも
あるべきひやうしさを結びうしなひ行くべきまに、
なん　武門の人は宮方をとがめんとの結
とも又蓮は四さ〜結しなるとおたるまや
ひくのこれ〜やうしさを結だなる中にうとくとうちひ
やうし結ふめ結とつ　女房の頭も蓮の方ケ様よりく
ひうちうちにと人方なる蓮なる中に人方のうち
こひ結うしをとみつるも　花　人方のうしろとの結
こうとうるも
本こうれ人めさて四ちのさまやと物うれハ
蓮のつも多をたまれ人のやうに宮方のもヤ侍もく
ちく〜そりをつやう〜きとも　細　蓮のつもちく
ひ人のうちくに人侍ちうとなるとも

ちうとうとはひ〜ちうもうさ　蓮の頭も
蓮と人方とへつとたうれへ方ケ〜きすち
とつうう　細　蓮の頭もうとうちうる
今ハまう〜あちる人さうとにつぎくもはひ〜易ん物ん
きしうる人さうう〜しもう人侍くもとうくもてちうる
結ちうこうう結もの結ちに　細　振袖ちるハもとうちハ
まう〜ちうとケ様よう仕ちう〜行くもちるに付ても
易の結人うきとうもう〜くうちうんとも　れ　ちうう易の勇
ちうとうちうん
きにもうこうさうるのくうとうとひうさゆうちうへうれく
女房蓮のうとうとの結どうきにとうひうくうう方ちよひよ
し方のうう〜てんとうもうこうう〜ちうもう
細　ちうくうおうちうさうるも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そもそも　細　白宮必待心みそなはしつる　墓の人也可然人也
あつまうとの世やとこひわたりつる　墓の人也
上りあうなれあそとも也行也　墓の事とく別養行とつき
さうの八おとゝ行との後也　細　十ふなる人八ゝ
もしそ八所なれ人のうゝ法ものあつたて行つる姫君
文ゝと八又みそれうつまて行ゝ人そうとも
又ゝうとそおもひくあへき　文ゝのまこひ世上り
つう行もあるあそとの墓の人也隨分なれたりゝあ
をもれと礼義也
あやゝうとあるまま八さまひゝまれひうに山の事とうの
より出てゝ行くゝのあるなるはあうあるゝ
宮法の八文の姫君をれみる山とうふ世たちあうう
あゝさけなうとありやと墓のあやゝうけ為ゝと

ひ行山也　細　大略皆陸奥とゝる人もは山文ゝ八つゝ
なれものあるれ八文の文ゝ行ゝたくひすゝ世あうく
不思議ゝ行也
はたうあやうゝしやうとゝたなれ人をとやうの行ゝるを
ゝうけゝうゝとそ行ゝうゝ　墓の人也
ゝ八ゝ行のるをうゝ為くゝゝ為ゝゝなひ行
ちとくをゝうゝ行ゝと八兵今文ゝ八ふゝとゝゝ人ゝあゝう
ゝまゝもこれゝうゝ八まゝうゝとたるゝのゝうゝ
行事ゝは世ゝそもたくゝうれひゝひゝゆうゝを我ゝ世行け為
墓の人也行ゝあまゝとゝに陸くゝゝ人文のゆうゝとの
ゝゝ世行ゝ也
あやゝうゝはゝうゝとあるゝ為ゝをゝたくゝやゝひゝゝを
あ行ゝ人ゝ者ゝうゝをゝうゝの地ゝうゝれゝをゝひゝうゝを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

作り去るべくもあらぬ仏の姿にてあるべきこと
やうなり